

本の万華鏡

推薦者 **大橋 照枝**  
(おおはし てるえ)

福澤大学国際経済学部・同大学院国際経済研究科教授、一九六三年京都大学文学部哲学科(社会学専攻)卒業。(株)大広マーケティングディレクター、九〇年国学院大学栃木短期大学助教授(マーケティング・広告論)を経て、九二年より現職。専門は、環境マーケティング、女性論、NPO(民間非営利組織)論、静脈系社会論など。主な著書は、『静脈系社会の設計』21世紀の新パラダイム(有斐閣)、『満足社会』をデザインする第3のモダニティ(持続可能な日本へのシナリオ)(ダイヤモンド社)など。

# 危機に立つ家族

四方寿雄 編著 — ミネルヴァ書房 一九八七年

マーケティングの究極目的は生活者に満足や幸福をもたらすことであるが、それによって環境破壊や将来世代の取り分を先取りしてしまふことがないこと、つまり、持続可能性(サステナビリティ)をおびやかすことがあってはならないこと、つまり、大前提である。

ところが、日本の経済や社会の仕組みは環境や将来世代の生存権よりも、今の経済、つまりGDP(国内総生産)の拡大第一主義といえる。例えば、食の分野では、毎年日本では食べ残しが十一兆円年間の農業および漁業の生産額に等しい(もある)といふのに、食育基本法や食育基本計画では食べ残しの問題に何ら触れられていない。廃棄するほど大量に消費する方が、経済が大きくなるからだとこの考え方である。



住の分野でも、東京や大阪などで増加する超高層マンションは、地震などで停電や断水した場合の備えがない。つまり持続可能ではないが、経済の拡大には大いに役立つためか、誰もが正面切って指摘しようとしていない。

本書では、第二章「消費社会の進展がもたらす家族の危機」の中で、第二次世界大戦後の日本の住宅問題の歴史を追いつながら、住宅問題が家族の病理現象とも深く関連してきたことを、多くのデータや事例をあげながら説明している。

ちょうど日本が高度成長期を経てバブルのピークを迎える頃に刊行されたもので、人権や環境よりも経済最優先で突進している最中であり、一方で高度成長批判の論客も多くさまざまな論陣が張られた時期である。本書では、早川和男『住宅貧乏物語』(一九七九年)、若波新書『日本住宅会議編 住宅白書 一九八六年版』(一九八五年)、ドメス出版『ジュリスト』増刊総合特集 No.30「現代日本の住宅改革」(一九八三年)、有斐閣などの論考が多く引用されている。

住宅の狭小さが、老人の自殺率・中年男性の死亡率・乳児死亡率・流産率・成人の心身機能減退率などを高めているといふ詳細なデータが紹介され、また、ヨーロッパでは住宅の人間形成・家庭形成に及ぼす影響の重要性に早くから気づき、「住は人権である」との思想を具現化する法律が英国やドイツなどで「住居法」として施行されていたことが示されている。

日本では、住宅は不動産業、ハウジングメーカー、家具・インテリア業界などの利潤追求の対象となり、近年では、住宅の間取りやデザインは良くなってきたもののデータを見ても、例えば、共同住宅の延べ面積は、一九八八年の四二・二二㎡から二〇〇三年の四七・五九㎡とそれほどリッチにはなっていない。

経済最優先より、子々孫々に至る持続可能な発展を、憲法ドイツ・スイデン(や環境法典・スウェーデン)で国の責務として織り込んでいる国を見るにつけ、今、日本が必要なのは「哲学」を見直すために読み返す価値のある論文ではなからうか。

CEL

## from editor's room

- 『「生活者」とはだれか 自律的市民像の系譜』天野正子 中央公論社(1996年)
- 『新・地球環境論 持続可能な未来をめざして』和田武 創元社(1997年)
- 『持続可能な社会システム』内藤正明、加藤三郎、金子熊夫 岩波書店(1998年)
- 『生活者の価値観に関する調査』生命保険文化センター生活研究部 生命保険文化センター(2002年)
- 『あてになる国のつくり方』井上ひさし、生活者大学校 光文社(2002年)
- 『天然ガス新世紀 持続可能なエネルギーシステムに導く究極の化石燃料』森島宏 ガスエネルギー新聞(2003年)
- 『持続可能な地域社会のデザイン 生存とアメニティの公共空間』植田和弘 有斐閣(2004年)
- 『持続可能な発展の経済学』Herman Daly著、新田功、蔵元忍、大森正之訳 みすず書房(2005年)
- 『都市の個性と市民生活』植田和弘、神野直彦、西村幸夫、間宮陽介編 岩波書店(2005年)
- 『Symbol of Happiness ~しあわせのシンボル~』しあわせ研究プロジェクト、アサヒビール株式会社お客様生活文化研究所 講談社(2005年)
- 『団塊世代のライフデザイン 決して一律でない就業志向と、夫婦間の思

- 惑の差』佐藤博樹、佐藤厚、大木栄一、木村琢磨 中央法規出版(2005年)
- 『私たちが住みたい都市 徹底討論 身体・プライバシー・住宅・国家』工学院大学連続シンポジウム全記録 伊東豊雄、鷲田清一、松山巖、上野千鶴子、八束はじめ、西川祐子、磯崎新、宮台真司 平凡社(2006年)
- 『持続可能な都市 欧米の試みから何を学ぶか』福川裕一、矢作弘、岡部明子 岩波書店(2005年)
- 『人間を考える経済学 持続可能な社会をつくる』正村宏宏 NTT出版(2006年)
- 『持続可能な社会への2つの道 産業連関表で読み解く環境と社会・経済』Carsten Stahmer、良永康平 ミネルヴァ書房(2006年)
- 『ピークフリー社会 人口減社会の新ライフスタイル』電通消費者研究センター編 丸善プラネット(2006年)
- 『この国の未来へ 持続可能で「豊か」な社会』佐和隆光 筑摩書房(2007年)
- 『若者の労働と生活社会』本田由紀編 大月書店(2007年)
- 『親子で読む地球環境の本 持続可能な開発 小さな一歩』カトリック・ステルン 講談社(2007年)
- 『キラリと、おしゃれ キッチンガーデンのある暮らし』津端英子、津端修一 ミネルヴァ書房(2007年)